

江津の萬葉 ゆかりの地 MAP

①角の浦

渡津・江津・嘉久志・和木・角本郷・宇屋川・波子の七浦を言います。大崎鼻灯台より江津の万葉展望



②辛の崎の歌碑

波子海水浴場
しまね海洋館
アクアス

至浜田

至浜田自動車道

②辛の崎の歌碑 (昭和62年建立)

揮毫者：元京都大学名誉教授
澤瀉久孝 先生
碑文：角障経 石見之海乃
言佐敝久 辛乃崎有
伊久里尔曾 深海松生流
荒磯尔曾 玉藻者生流
(万葉集 卷2 135)



③二宮交流館の歌碑 (平成10年建立)

揮毫者：元京都大学教
清水克彦 先生
碑文：依羅娘生誕伝承の里
裏面には地元山藤朝之氏の揮
毫で人麻呂の死を知った依羅
娘がその悲しみを詠んだ歌
2首が刻まれています。



④郡庁仮国庁跡

大化の改新により全国に国・郡・里の制がおかれた。人麻呂が石見の国に赴いた頃には国庁舎がまだなかったので、一時期、恵良の郡庁を仮国庁としたとある。



⑤君寺の歌碑 (平成5年建立)

揮毫者：元京都大学教
清水克彦先生
碑文：勿念跡 君者雖言
相時 何時跡知而
加吾不恋有牟
(万葉集卷2 140)



⑥高神の丘

応神天皇の時、全国に山守部を配置。石見の国の初代山守部として、角山君内膳が恵良の里に移り住みのろし台が置かれた。恵良の里から高角山が望める。



⑦柿本神社の歌碑 (昭和44年建立)

揮毫者：元大阪大学名誉教授
犬養孝 先生
碑文：石見乃也 高角山之
木際従 我振袖乎
妹見都良武香
(万葉集 卷2 132)
歌碑は、柿本神社境内にあり
ます。



⑧真島

真島の岩頭に立つと北に日本海、南に眼前の和木地区の赤瓦の屋根の向こうに高角山(島の星山)が望めます。「和木海岸の真島の岩山にあがると…(中略)当時の石見の海の荒涼とした海景は 彷彿とそこにうかび出る感がある。」—犬養孝著「万葉の旅」より—



⑨人丸神社の歌碑 (昭和48年建立)

揮毫者：元九州大学教授
高木 市之助 先生
碑文：石見のや 高角山の
木の隙より 我が振る袖を
妹見つらむか
(万葉集 卷2 132)
歌碑に隣接して、人丸神社も
あります。



制作発行

江津市観光ボランティア
ガイドの会
江津市観光協会
☎0855・52・0534

黒松
海水浴場

至大田(石見銀山方面)

道の駅 サンピコごうつ

⑬屋上の山(浅利富士)

⑭樟道駅(都治駅)

江津と人麻呂

柿本人麻呂は、西暦700年代の初めに石見の国の初代国司として赴任しました。そして、ここ江津の恵良の里で依羅娘子を娶ったのですが間もなく都へ戻る別れの日が来しました。その時詠み交わした歌が『石見相聞歌』と呼ばれる作品群です。万葉集巻2(131~139)に掲載されています。この相聞歌群には、江津市周辺の地名が6箇所歌枕として詠み込まれています。今も、石見には人麻呂が生きた1,300年前とさほど変わらぬ風景が残っており、訪れる人を古代の相聞歌の世界に誘います。

⑬屋上の山(標高 246m)

別名 浅利富士、室神山、高仙
「…屋上の山の雲
間より 渡らふ月
の惜しけども…」
(万葉集 卷2
135)



⑮江東駅

山陰道石見6駅の一つで松川町八神にあったと言われる。各駅ごとに5頭の馬が常備されていたとされる。



⑭江西駅(人麻呂渡し)

山陰道石見6駅の一つで金田町にあったと言われる。近くには人麻呂が大河「江の川」を渡った所とされる“人麻呂渡し”の標柱が見える。

⑬靡けこの山

「…(略)妹が門見む 靡けこの山」人麻呂の長歌の一節です。古代人は、山を精霊の宿る神秘的の地と見ていました。その神々のこもる不動の山(高角山)に向かって「靡けこの山」と叫んだのです。



⑪人麻呂と依羅娘の銅像と記念碑(歌碑)

万葉銅像建立実行委員会が高角山公園に設置。銅像は平成18年建立。銅像制作は地元彫刻家 田中俊晔氏。記念碑(歌碑)は、地元書道家 山藤耕子氏の揮毫で、人麻呂の長歌の一節と依羅娘の歌1首が刻まれています。



⑩高角山公園 展望台の歌碑 (平成24年建立)

揮毫者：奈良女子大学名誉教授 坂本 信幸先生
碑文：笹の葉は み山もさやにさやげども
我は妹思ふ別れ来ぬれば
(万葉集 卷2 133)
公園内の高手に、日本海に注ぐ江の川と屋上の山を望む展望台がある。



萬葉集「石見相聞歌」

柿本朝臣人麻呂石見の国より妻と別れて上り来し時の歌

長歌（萬葉集 卷二 一三二）

「石見の海 角の浦廻を

浦なしと 人こそ見らめ

潟なしと 人こそ見らめ

よしゑやし 浦はなくとも

よしゑやし 潟はなくとも

鯨魚取り 海邊を指して

和多津の 荒磯の上に

か青なる 玉藻沖つ藻

朝はふる 風こそ寄せめ

夕はふる 浪こそ来寄れ

浪の共 か寄りかく寄る

玉藻なす 寄り寝し妹を

露霜の 置きてし来れば

この道の 八十隈毎に

万たび かへりみすれど

いや遠に 里は放りぬ

いや高に 山も越え来ぬ

夏草の 思ひ萎えて

偲ふらむ 妹が門見む

靡けこの山」

長歌（萬葉集 卷二 一三五）

「つのさはふ 石見の海の

ことさへく 辛の崎なる

海石にそ 深海松生ふる

荒磯にそ 玉藻は生ふる

玉藻なす 靡き寝し兒を

深海松の 深めて思へど

さ寝し夜は いくだもあらず

はふつたの 別れし来れば

肝向かふ 心を痛み

念ひつつ 顧みすれど

大舟の 渡の山の

黄葉の 散りのまがひに

妹が袖 さやにも見えず

孀ごもる 屋上の山の

雲間より 渡らふ月の

惜しけども 隠らひ来れば

天伝ふ 入日さしぬれ

大夫と 念へる吾も

敷妙の 衣の袖は

通りて濡れぬ」

反歌二首（萬葉集卷二 一三二 一三三）

「石見のや 高角山の 木の際より

わが振る袖を 妹みつらむか」

「小竹の葉は み山もさやに 乱げども

われは妹思ふ 別れ来ぬれば」

反歌二首（萬葉集 卷二 一三六 一三七）

「青駒の 足搔きを早み 雲居にそ

妹があたりを 過ぎて来にける」

「秋山に 落つる黄葉 しましくは

な散り亂ひそ 妹があたり見む」

柿本朝臣人麻呂の妻依羅娘子 人麻呂と相別るる歌一首（萬葉集 卷二 一四〇）

「な思ひと 君はいへども 逢はむ時 何時と知りてか わが戀ひざらむ」